

緑丘の40有余年を振り返って

君 羅 久 則

私が始めてこの緑丘の地に足を運んだのは、1972年(昭和47年)3月のことでした。小樽商科大学に赴任するための準備として、入居予定の官舎を下見に来たときでした。最初に割り当てられた官舎は、大学よりもまだ上になる、当時4階建ての智明寮の近くに立つブロック建ての2軒長屋の一つでした。北海道に生まれ育ったけれども、小樽は、学生時代に大学と生まれ故郷を行き来する際に汽車(当時は本当に蒸気機関車でした)の窓から駅の様子やその先にあずかに見える街の様子しか目にすることがありませんでしたから、駅からタクシーに乗って上ってきましたが、商大通りも三叉路を過ぎたあたりから人家も少なく、畑や林や森が多くなってきて、山の中へ入っていくような感じを抱いたものでした。それくらい、この緑丘は自然に富んでいました。その後、いったん仙台にもどり、準備を整えて3月末に再び小樽に参りまして、4月になってすぐに当時の学長先生でいらっしゃる実方正雄先生から辞令を拝受いたしました。その当時はまだ、今の教授会の開かれる第1会議室の建物はなく、今の副学長室を2つつないでさらに学長室まで一つの部屋になっていて、そこで教授会が開催されていました。その部屋の海側の手前に当時の学長室があって、そこで辞令をいただいたのでした。以来、41年間にわたってこの緑丘で勤務することとなったわけであります。この長さの時間では、色々なものが変化します。「学園だより」にも書きましたが、今年3月に退職間際になって、日本の寿命の長さについて新聞記事が出ました。それによれば男の平均寿命は79.59歳とのことでしたから、その半分以上の年月をこの緑丘で過ごしたことになります。

当時は一部3階建てになっていて、本館と呼ばれていた建物など、まだま

だ、鶯色の木造の瀟洒な校舎が多く残っていました。新しい鉄筋コンクリートの校舎も一部立ち始めていた頃でしょうか。今の3号館もまだ中央階段のあたりくらいまでしかなく、図書館の建物もいまの渡り廊下のあたりまでの大きさで、その脇の外側のかべに2階へ上って図書館に入る階段がついていました。その後しばらくしてから、いまの正面玄関までと後ろの海側への部分とが拡張されたようです。昭和43年5月に発行された『小樽商科大学一覽』には口絵として「新付属図書館・校舎」の写真が載っていて、昭和42年9月竣工と記されています。いっぽう、古い校舎といえば、私が赴任した当初は、正門から道路を挟んで向かい側、いまの軟式テニスのコートとバスターミナルの辺りに2階建ての短期大学の校舎がまだ建っていました。その後まもなく今の3号館の残りの部分が新築され短期大学の事務室や教室などに当てられるようになり、このしゃれた造りの古い校舎も姿を消すことになったようです。1号館の研究棟もまだ山側の玄関あたりまでの建物で、その奥の部分はだいぶ最近になってから建て増しされたものです。

41年の長い時間では、学長も何代かかわられました。冒頭に申しあげましたように、最初の赴任の辞令をいただいたのは実方正雄先生でしたが、その後、伊藤森右衛門先生、長谷部亮一先生、藤井栄一先生、さらに山田家正先生、秋山義昭先生と続き、そして現在の山本眞樹夫先生と、実に7代にわたる学長先生のもとで勤務したことになります。最後の退職の辞令は、今年3月に山本眞樹夫先生から拝受いたしましたし、41年にわたる緑丘の生活にピリオドをうったことになります。

人々や建物は次第に変わりましたが、あまり変わらないのはその建物や人々を見守るように取り囲んでいる緑丘の豊かな自然だと思います。眼下には広々とした石狩湾を見渡すことができますし、背中には於古鉢山や天狗山が控え、またすぐ裏手には林や森が連なっています。キャンパスのなかにも所狭しとばかりにさまざまな木々や草花が植えられていて、春には輝かしい花々と緑を見せてくれますし、秋には、燃え立つような紅葉で元気付けてくれます。正門を出ると地獄坂、もともとは俗称であったと思われませんが、い

つか「地獄坂」という立派な看板が立てられるようになって、正式に(?)地獄坂になってしまっていますが、この地獄坂の通りもずいぶんと変化したようです。1970年代にはまだまだ車も珍しいくらいで、今のようにバスも通っていませんでした。その脇には石垣で護岸の補強がなされた川が流れていましたが、近年になってバスを通すべく、また車の行きかきも増えたことから、道路を広げ、歩道を設けるべく半分の川幅に埋め立てられてしまっています。しかし、それでも春になれば、雪解け水の流れる音が聞かれるし、ふきやせりなどの植物の緑を川底近くに見ることもできます。

このような、自然豊かな緑丘に半生をすごすことができたということは私にとって本当に幸せなことであったと思っています。学長先生を初め、教職員の皆さんのご協力があった始めて可能であったことですし、また、立派な代々の学生諸君に取り巻かれていたおかげであったと思われまます。従って、私は、このような緑丘を作り上げてこられた、全ての方々とその名の如く自然あふれる緑丘に心からの感謝を申し上げたいと思います。そして今後も、一人でも多くの学生や人々から感謝されるような小樽商科大学であり続けてほしいと願っています。